

〔資料紹介〕

仙台藩巨理伊達家の蔵書と郷学口就館

一、はじめに

「北海道伊達市噴火湾文化研究所所蔵（伊達市開拓記念館旧蔵）伊達家文庫」（以下、「伊達家文庫」と略称）は、仙台藩伊達家一門二席、巨理伊達邦成が、明治三年、現在の伊達市地域（旧胆振国有珠郡）に多くの家臣を伴って移住した折りに持参した巨理伊達家およびその郷学口就館が所蔵した書籍、記録文書からなり、近年、伊達家から同市へ寄贈されたものである。「伊達家文庫」は、政宗公書状、忠宗公書状をはじめ、巨理伊達家記録、仙台藩記録、伊達日誌、開拓関係公文書などの各種諸記録、多岐の分野にわたる国書及び漢籍、準漢籍などを所蔵し、伊達家一門である邑主が営んだ領地経営から生活全般に至るまで、就中、家臣らを含めた彼ら武士たちの教養形成の一端を知る上で貴重な古文書や書籍から構成されている¹⁾。

山 邊 進

伊達邦成とその家臣たちの北海道移住²⁾は、仙台藩が奥羽列藩同盟に加わり、官軍に抵抗、敗北したことに端を発する。その責任を問われた仙台藩は、石高が六十二万石から二十八万石に減封となり、巨理伊達家二万三千石は巨理、宇多両郡の領地を没収、一三〇石（一三〇俵支給）に減らされた上、その旧領地には盛岡藩南部家が移封されるという事態に至った。

千三百余の家臣を養うことができなくなった邑主伊達邦成は、明治二年八月、家老田村顕允の献策を容れて主従による北海道移住を明治政府に請願した。当時、政府に於いても諸藩や寺院などによる北海道分割統治が計画されており、巨理伊達家の請願はそれに応ずる形で承認された。そして、翌三年三月伊達邦成に率いられた第一回移住が組織され、それ以後、明治十四年に至るまで九回におよぶ旧家臣や領民たちの移住が続いたのである。

小論は、右の如き経緯を有する「伊達家文庫」について若干

の紹介を試みることを目的とするものであるが、併せて巨理伊達家が設立した郷学日就館の学問についても言及したい。

二、巨理伊達家および郷学日就館旧蔵の書籍について

巨理伊達家および郷学日就館が旧蔵した書籍は、北海道移住に前後する明治二年の足利学校への書籍献納、時期・宛先が不明な書籍献納一件によって分散され、現在はその献納を免れた書籍が江戸初期以来の古文書等の諸史料や明治以降に収集された書籍とともに伊達市噴火湾文化研究所に「伊達家文庫」として所蔵されている。

そこで以下に於いて、二回にわたる書籍献納および「伊達家文庫」について概観する。

(一) 足利学校への献納書籍

幕末維新の激動期のなか、その存在意義に対する疑念さえ生じ始めていた足利学校は、経営的にも創建以来の最大の危機的状況に直面していた。その足利学校復興を志した足利藩主戸田忠行は左大臣近衛忠房に働きかけ、慶応三年、忠房は古くからの姻戚関係にある仙台藩主伊達慶邦に学田五百石の援助を行わせることとした。しかし、戊辰戦争によって事態は急転し、奥羽列藩同盟の盟主であった仙台藩はその責任を問われ、近衛忠

房の左大臣辞任も加わり、仙台藩による足利学校援助の計画は頓挫した。⁴ 右の如き経過ののち、明治二年三月、巨理伊達藤五郎邦成がその郷学日就館の蔵書の寄贈を申し出たのである。その折の書状、伊達家一門伊達藤五郎より学校へ書籍献納一条⁵が以下のものである。

今般、王政御維新二付、古代御隆建之足利學校所大二再興之聖勅客歳より貴藩御委任被爲蒙仰候由、天下之美業卜奉欣勤感嘆候、私儀元陸奥国巨理宇多両郡宗家より分配領地罷在候、采邑館下二矮小之學習所相構、竊二日就館と名号仕、年來上下文武之教育仕置候処、此度右地所他藩御扱二罷成候事二候得共、爾來右學習所二^而教授可申様無之段二罷成候、依之奉願候儀^者 右日就館^江 旧來相備置候藏書籍風雨虫鼠二損敗仕候儀^者 痛措之次第御座候間、今般奉之御儀御座候条、藏出之内別紙調書之通些少獻納仕、弘ク天下之衆庶御教諭万分之一二も罷成候様被成下候八八、聊祖先之遺訓二も相協候儀と冥加至極奉存候、何卒微衷之程御許察、願趣呈御採用被成下度奉願候、

誠恐誠惶篤首謹言

伊達亀三郎一門

伊達藤五郎

明治二年三月
戸田長門守様御中
(用紙奉書二ツ折^{二面})

書目	唐本
一 廿一史	唐本
史記	前漢書 後漢書
三国史	晋書 宋書
南齊書	梁書 陳書
魏書	北齊書 周書
隋書	南史 北史
唐書	五代史 宋史
遼史	金史 元史
右全部	
一 資治通鑑	唐本 全部
一 貞觀政要	全部
一 唐鑑	全部
一 名臣言行録	同
一 伊洛淵源録	同
一 欽定四經	唐本 同
一 三禮義疏	唐本 同
一 汪武曹大全	同

一 周張全書	同
一 二程全書	同
一 朱子文集	同
一 朱子語類	同
一 大學衍義	同
以上総計 ^{ママ}	

右の書状に拠れば、書籍献納に至る直接の動機は「年來上下文武の教育仕置候処、此度右地所他藩御扱に罷成候事に候得共、爾來右學習所にて教授可申様無之段に罷成候」とある如く、巨理伊達家の領地が仙台藩の削封に伴って没収され、その旧領に盛岡藩南部家が転封してくることによる。すなわち南部家転封により日就館を廃止せざるを得なくなり、その蔵書の一部を献納したいとするのである。この書籍献納に至った背景には、すでに指摘がある如く、上述の仙台藩への近衛忠房からの援助要請とその失敗という経緯があったと考えてよからう。しかし、直接の動機はあくまでも南部家転封による領地没収にある。

ところで、従来より、この書籍献納と北海道移住を結び付けて考える指摘が先学によってなされている。⁽⁷⁾ すなわち、結城陸郎が、

その契機は、一に宗家伊達慶邦の足利学校援助が不成功となつたことに鑑み、慶邦の偏諱を受けて邦成と称した如く親密

であったこともあるが、最大直接的契機は明治二年、政府の蝦夷地開拓方針に依じて、家臣田村顕允と謀り、旧臣八千人、一三六二戸とともに蝦夷地胆振国有珠郡（現伊達市）に移居することになったことである。

と言う如くである。この指摘は邦成らの北海道移住を「最大直接的契機」として書籍献納が行われたという理解である。しかし、いま一度、明治二年三月という時期について考えてみると、北海道移住を「最大直接的契機」として考えることには些かの疑念が残る。すなわち、この時期、まだ北海道移住の内願書は提出しておらず、同年八月、太政官への提出に至るまでの間、藩内には移住は宗藩に忠義を欠くといった議論があり、移住に奔走した家老田村顕允が宗藩から猜疑を受けるなど、北海道移住についてはなお紆余曲折があった。斯くの如き先行きの見えない不安定な状況のもとで、北海道移住を前提として書籍献納を先行させる形で行ったとは考えにくいのである。⁽⁸⁾

邦成が献納願を提出した時期を前後して、同年一月には伊具・亘理・宇多三郡の農民代表によって明治政府に従来通りの伊達支配を求める嘆願書が提出されている。また、同じ三月には佐幕派の仙台藩士が諸藩の浪人を集めて騒動を起こす事件が生じ、邦成がみずから鎮圧に出向いている。加えて、上引の献納書状に「此度右地所他藩御扱に罷成候事に候得共、爾來右學習所にて教授可申様無之段に罷成候」とある如く、南部家の転

封を受け入れ、かつそれによって「學習所」を閉鎖する旨が記されていることを勘案すれば、この献納願の提出は、邦成が宗家伊達亀三郎宗基の後見人として未だ政情が定まらない仙台藩の現況を顧みて、いま一度明治政府に対して一門を代表して恭順の意を示すための行動と理解してよいのではなからうか。献納された書籍が唐本を含む大部の史書や経書という伊達家および日就館蔵書を構成する上で基本的かつ根幹的な書籍が中心であることも、政府の方針を受け入れて日就館を閉鎖し旧領を離れる邦成の決心を示すには当然の選択と考えられるのである。

足利学校へ献納された書籍は、右の書状に添えられた「書目」によれば、唐本を含む十四部である。実際の献納は明治二年六月十八日、伊達藤五郎家老常盤新九郎のちに田村顕允と改名、萱場源之助によって足利学校へ持参された。その折りの「調」が以下の如くである。

調

一 二十一史 四箱

但冊員三百九十八冊

一 四書大全 壹箱

但冊員四十八冊

一 朱子語類大全

但冊員四十六冊

- 一 朱子文集 壹箱
- 但冊員八拾冊
- 一 禮記彙纂
- 一 周禮彙纂 壹箱
- 一 儀禮彙纂
- 但冊員百二十八冊
- 一 大學衍義
- 一 伊洛淵源錄
- 一 周子全書
- 一 張子全書
- 一 二程全書
- 但冊員五十八冊
- 一 名臣言行錄
- 一 唐鑑音註 一箱
- 一 貞觀政要
- 但三十七冊
- 一 資治通鑑 一箱
- 但冊員百廿八冊
- 一 周易折中
- 一 詩經傳記彙纂
- 一 書經同 一箱
- 一 春秋同

但五十冊

總箱員 壹貳

以上

明治二年六月

伊達藤五郎家老

常盤新九郎

菅場源之助

これらの献納書籍のうち、現在、足利学校には『資治通鑑』『大学衍義』『周子全書』を除く十五部八百三十九冊の書籍が所蔵されている。そして、そのうち、『三禮義疏』『欽定四經』（増訂）四書大全』には朱印「巨理郷／學日就／館文庫」、『龍頭新增四書大全』には朱印「日就館／藏書記」、『十七史』（献納目録）では『廿一史』（には朱印「巨理郷／學日就／館文庫」）『御文書』（●●は伊達家家紋三引両）、『立齋先生標題解註音釋』（十八史略）には朱印「日就館／藏書記」、他朱印墨印三種、『東萊先生音註』東鑑』には朱印「巨理郷／學日就／館文庫」、朱印「伊達／邦成之章」が捺印されている。

また、『十七史』は、「献納目録」には「宋史」「遼史」「金史」「元史」を含む「廿一史」とあるが、現存は『十七史』（明毛晉編 明崇禎元年至十七年刊、汲古閣、清順治修、清補）に『弘簡録』『續弘簡録元史類編』が付されている。

なお、『資治通鑑』『大学衍義』『周子全書』については、明治五年調査時には所蔵されていたが、その後、栃木県保管中に散逸したらしい。⁽⁹⁾

(二) 宛先不明の書籍献納

家老田村顕允に關わる「田村家文書」には、左記の如き和書を含む三十四部の「献納書籍目録」が存在する。⁽¹⁰⁾

- 一 四書鈔説(闕)
- 二 四書摘疏(闕)
- 三 書經集傳
- 四 禮記集注
- 五 禮記集説(闕)
- 六 小學句讀
- 七 小學纂註(闕)
- 八 五經(闕)
- 九 近思録(闕)
- 十 大学衍義(闕)
- 十一 大學摘疏
- 十二 論語摘疏
- 十三 四書蒙引
- 十四 小學示蒙句解(闕)

- 十五 大日本史(闕)
- 十六 大國史略(闕)
- 十七 二十二史劄記
- 十八 後漢書
- 十九 小本十八史略
- 二十 日本王代一覽(闕)
- 二十一 本朝通鑑(闕)
- 二十二 泰西史鑑(闕)
- 二十三 資治通鑑綱目
- 二十四 太平記綱目
- 二十五 史記評林(闕)
- 二十六 本十八史略
- 二十七 元明史略(闕)
- 二十八 貞觀政要(闕)
- 二十九 日本外史(闕)
- 三十 皇朝史略(闕)
- 三十一 清鑑易知録
- 三十二 續皇朝史略
- 三十三 通鑑學要
- 三十四 漢書評林

この「献納書籍目録」についてはその経過を詳らかにしがたい

が、現在のところ、明治四年の暮れに伊達邦成が所持していた兵器とともに開拓史に献納した書籍の目録かと推測される。すなわち、第三回移住が行われた明治四年は農具などを運んだ帆船の到着が遅れたため、耕作期に狂いが生じてしまい、さらに夏秋と凶作が続く自体となった。榎本守恵によれば、邦成は札幌の開拓史に嘆願して米百石を借りて急場を凌いだだが、暮れには再び開拓史に嘆願して、岩村通俊判官の好意で五百両、函館備米の一時繰り替えをはかった。そして、この危機を乗り越えるために書籍・兵器の献納願が提出されたというのである。榎本が如何なる史料によって書籍・兵器の献納願があつたとするかは未だ明らかにできないが、北海道移住後の書籍献納は管見の及ぶ範囲ではこの一件のみである。献納された書籍については、その経緯や現在の所蔵が確認できないため言及を控えるが、『四書摘疏』など仙台崎門学派の校田虎門の著作が含まれていることが注目される。

(三) 伊達市噴火湾文化研究所蔵書籍

「北海道伊達市噴火湾文化研究所蔵(伊達市開拓記念館旧蔵)伊達家文庫」については、伊達市教育委員会『伊達市開拓記念館所蔵 伊達家文庫目録』(以下、『伊達家文庫目録』と略称)が寄贈目録としてその全容を示している。まだ詳細な書籍整理が行われていないため、正確な書籍数は明らかにしがたい

が、そのうち日本漢文に関わる書籍は百四十三部である。⁽¹²⁾ いま、百四十三部の書籍のうち、江戸儒学書に限って述べれば、明治初年の北海道移住という過酷な環境もあり、その大部分に闕本があり、書籍の状態もよくない。それゆえに書誌学の研究対象とはなりにくく、いままで注目されることはなかった。ところで、「伊達家文庫」が所蔵する江戸儒学書の特徴を挙げれば、山崎闇斎を筆頭に崎門学派の著述が多いことである。すなわち、山崎闇斎の校刻訓点本・表章書・編次書については以下の如くである。⁽¹³⁾

- 一、易學啓蒙 四卷(闕)
- 二、孝經刊誤 一卷
- 三、四書 十四冊(闕)
- 四、近思錄 十四卷(闕)
- 五、小學本註 二卷
- 六、敬齋箴
- 七、大家商量集 (存下巻)

また、崎門学派の講義聞書、筆記類としては、

- 一、綱齋先生近思錄講義 浅見綱齋 日就館旧蔵写本 四冊
- 二、(周)易本義講義 三宅尚齋 写本 一冊
- 三、易本義大綱 三宅尚齋 写本 一冊
- 四、尚齋先生論語筆記 三宅尚齋 写本 一冊
- 五、象傳續筆記 三宅尚齋 写本 一冊 享保十八年起筆
- 六、韞藏録 佐藤直方 写本 宝曆二年序 十六巻

うち巻十一・十二 闕

- 七、講學鞭策録 佐藤直方 写本 一冊
 八、大學經文師説 若林強斎 写本 一冊

がある。

右の講義聞書、筆記類のうち『易本義大綱』は、『伊達家文庫目録』は山崎闇斎の著述とするが、蓬左文庫や大阪天満宮御文庫に所蔵される三宅尚斎『易本義筆記』の一部と考えられる。『象傳續筆記』は、『伊達家文庫目録』は『象傳續算記』として山崎闇斎の講義録とするが、やはり蓬左文庫や大阪天満宮御文庫に所蔵される三宅尚斎『易経本義續筆記』の一部であろう。以上の書籍のうち、講義聞書、筆記類は写本によってのみ現在に伝わるものであり、その本文校訂を行う際の貴重な資料である。

崎門学派の道統を受ける仙台藩儒のものとしては、まず、以下の如き遊佐木斎、佐久間洞巖、桑名黙斎の講義聞書がある。¹⁴⁾

- 一、木斎先生講筵中和集説講義 一冊 写本
 二、木斎先生説近思録（政事 卷十存） 一冊 写本
 三、氣質本然性辨 佐久間洞巖 一冊 写本
 四、小學講義 桑名黙斎 一冊 写本

遊佐木斎（一六五八～一七三四）は、名は好生、仙台の人で闇斎の門に学んだのちに仙台藩の儒員となり、仙台藩に於ける崎門学派、垂加神道の祖となった人物である。また、闇斎の講義「本然氣質性講説」の筆録者としても知られている。右の『木斎先生講筵中和集説講義』は元禄十年六月十九日に為誠斎が筆録した講義聞書であり、『木斎先生説近思録』とともに「伊達家文庫」のみに所蔵が確認される木斎の講義聞書である。佐久間洞巖（一六五三～一七三六）は、名は義和、仙台の人で、遊佐木斎に師事して木斎門下の俊英と称される。その学問の中心は史学であり、その主著に『奥羽觀蹟聞老志』がある。『氣質本然性辨』は『伊達家文庫目録』では山崎闇斎述とあるが誤りである。本書は佐久間洞巖が師の遊佐木斎の説を整理したものである。序によれば、元禄八年七月にまとめたものを当時江戸に滞在中の木斎に添削を乞い、十月に改めて清書して家蔵したものである。洞巖自筆本が宮城県図書館に所蔵されており、本書は誰かがそれを再写したものである。

桑名黙斎（一六五二～一七二二）は、名は養節、京都の人で、仙台藩に仕えた後に木斎の勧誘により闇斎に学び、その臨終に侍した。垂加神道の継承者として著名である。『小學講義』の奥書によれば、黙斎の弟子である内蔵景明が寛保三年に筆録した講義録を巨理伊達家臣山村内蔵之進成実が筆写したものと考えられる。

ついで、時代は下るが、やはり崎門学派の道統を継ぐ桜田虎門の以下の如き著作および講義稿本がある。これら虎門の著作の所蔵は後述の如く「伊達家文庫」の大きな特徴と云うことができる。

- 一、大學摘疏 教學書院板 日就館旧蔵書本 下巻存
- 二、中庸摘疏 日就館旧蔵写本
- 三、論語摘疏 村山元孝書写本 天保四年（同七年書写） 卷六・卷十五（二十存）
- 四、孟子摘疏 日就館旧蔵写本 卷三・六闕
日就館旧蔵写本 卷二闕
（以上、四書摘疏）
- 五、近思錄摘疏 写本 卷二闕
- 六、「曾子曰士不可以弘毅章」（寛政十二年庚申秋七月質年二十七在虎門）
- 七、「回也其庶乎章」（寛政十二年庚申秋八月九日 質年二十七）
- 「四子言志章」（寛政十二年庚申秋七月 質二十七 在虎門）
- 「顔淵問仁章」（寛政十二年庚申秋八月既望 起稿）
- 「顔淵曰請問其目章」（丙寅 文化三年 四月 再考）
- 「仲弓問仁章」（寛政十二年庚申冬十月望日 鞠溪書院

質年二十七）

桜田虎門（一七七四～一八三九）は、名は景質、欽齋とも号す。仙台の人で、はじめ志村東嶼に学び、のちに江戸に出て山崎闇斎、三宅尚斎の流れを汲む服部栗齋の門に入り、崎門学派の道統を受けた。栗齋が嘗む学塾鞠溪書院の助教となるが、やがて藤堂侯に招かれ江戸虎ノ門の藤堂家の藩邸でその嗣子や家臣に教授を行った。寛政十年の長崎遊学を経て、文化四年仙台藩儒員、同七年江戸藩邸に順造館設立を求めて叶い、その督学に就いた。そのちに仙台に戻り、養賢堂教授となるも、大槻平泉と学制改革を巡って対立、その職を辞している。詳細は次節に譲るが、巨理伊達家および郷学日就館とも縁の深い人物である。

右の『大學摘疏』『中庸摘疏』『論語摘疏』『孟子摘疏』は合わせて『四書摘疏』とも別称されるが、刊本は『大學摘疏』しかなく、他三書は写本でのみ伝わっている。そのうち、『孟子摘疏』は伝本が少ないらしく、管見の及ぶ範囲では、現在、『伊達家文庫』所蔵本が巻二を闕くものの、その所蔵を確認できる唯一のものである。

「曾子曰士不可以弘毅章」は、「欽齋藏圖書印」の朱印があり、虎門自筆の講案である。巻末に「寛政十二年庚申秋七月質年二十七在虎門」と記してあり、「鼓缶子年譜」に拠れば、虎門が

二十七歳で虎ノ門の藤堂邸内に居住してその嗣子や家臣たちに講義を行っており、その時の講案である。

「回也其庶平章」ほか四章からなる一卷も講案であるが、虎門の筆とは異なり、誰かが浄書したものと考えられる。そのうち、寛政十二年七月から八月にかけての三章は「曾子曰士不可以弘毅章」と同じく、藤堂邸で行われた講義であり、同年十月の一章は麹溪書院で行われた講義である。「文化三年 丙寅四月 再考」の記述がある一章のみ時代が遅れており、これは後年になってからの訂正稿であろう。そして、これらの『論語講義』のちに『論語難章講義』としてまとめられ、写本として宮城県図書館に所蔵されている。

巨理伊達家および日就館には、以上の「伊達家文庫」所蔵の虎門の著作に加え、前出の「田村家文書」所収「献納書籍目録」にも『四書摘疏』『大學摘疏』『論語摘疏』の書名が見られる如く、虎門の著作が多く所蔵されていた。また、虎門に関連が考えられる書籍として「伊達家文庫」には、新井白蛾の易に関する著作『古易斷時言』『増初定本易學小筌』『鼈頭定本易學小筌』が所蔵されている。そもそも虎門は『五行易指南』（文化十三年刊）『推命書』（天保二年刊）などの著作で著名であり、後世への影響も大きい。虎門の易学は方術を中心としたものであるが、その虎門が『五行易指南』に、

余既述斯篇、偶得白蛾先生所著易學小筌。僅僅一小卷。取而

閱之、其於占法、釣深闡幽、殆極其瀟。固非吾儕淺末所敢及也。蓋予於易象之說、固嘗推先生、爲本邦第一矣。（卷三）とある如く、占法に於ける白蛾の功績に言及している。「伊達家文庫」にはこのほか、易関係の書籍が少なからず見られるが、白蛾の著作を含めてこれらの書籍の存在も虎門の影響と見て大過あるまい。

上述してきた如く、巨理伊達家および郷学日就館の蔵書は一件の献納と現在の「伊達家文庫」によって復元が可能である。郷学の蔵書については水戸藩の郷学蔵書が現在に伝わるが、巨理伊達家および郷学日就館の蔵書もそれに優るとも劣らない全容を示している。武士階層の教養形成という視点から見たとき、これらの書籍はその貴重な資料となり得るのである。

「伊達家文庫」には、言うまでもなく『訂正五経』『訂正四書集註』『小学本註』『通書』などの養賢堂刊本や後藤芝山点『音訓五経』などの書籍も見られるが、それに比して崎門学派の書籍の占める割合は大きい。そこで、次節に於いては、巨理郷学日就館の学問と崎門学派の関係について概観する。

三、郷学日就館と崎門学派

巨理要害（要害屋敷、臥牛城ともいう）に設けられた郷学日就館は、仙台藩の郷学に於いて元禄四年（一六九一）創建の岩

出山有備館に次いで古く、その創建は明和、安永年間（一七六四―一七八〇）に遡る。寛政年間（一七八九―一八〇〇）にはその郷学としての体制を整えたとされ、十二代当主伊達宗恒およびその父宗賀に至って、仙台より崎門学派の道統を継ぐ桜田虎門を招聘して日就館の学事の一切を委ねたという¹⁶。その日就館という名称は『詩経』周頌・閔予小子之什・敬之篇「日就月將、學有緝熙于光明」¹⁷に就り月に將ひ、學んで光明に緝熙すること有らん¹⁸）にちなむものである。そこで本節に於いては、崎門学派と日就館との関わりについて、主に桜田虎門を中心に「伊達家文庫」および周辺史料から考察を加える。

仙台藩に於いては、江戸前期、崎門学派の学問が盛んであった。すなわち、山崎闇齋に学んだ遊佐木斎が四代藩主伊達綱村に儒臣として近侍して以来、その門下から藩教学を推進する人物を輩出した。元文元年に創立された藩校（明和九年に養賢堂と改名）は、初代高橋玉斎、二代高橋周斎、三代田辺染斎と歴代の学頭（初代、二代までは養賢堂主立と称する）が崎門学派の道統を受けた人物であった。しかし、文化七年、虎門と同じく志村東嶼門下であり、のちに昌平巒に学んだ大槻平泉が養賢堂四代学頭に就任して、大学頭林述斎の指導のもと学制の刷新を企てた。虎門はその改革に真っ向から反対したが時宜を得ず、養賢堂を辞して野に下ることとなった。そのうち、彼は学塾教養書院を開いて門弟の教育と著述に専念するが、ほぼ同じ時期

に日就館に招かれて、その学事を委ねられたのである。

「伊達家文庫」には、前節で述べた如く、虎門の講案の一部や、その主著である『論語摘疏』『孟子摘疏』『大學摘疏』『中庸摘疏』が闕本ながら所蔵されている。そして、これら虎門の著作に加え、山崎闇齋の校刻訓点本や編次書など、浅見綱斎・三宅尚斎・佐藤直方・若林強斎や仙台崎門学派の遊佐木斎・桑名黙斎の講義聞書や筆記の如き崎門学派の書籍が多く残されており、これらの蔵書は、虎門が日就館に於いて学事を司ったことの具体的な表れとして考えてよいであろう。換言するならば、藩校養賢堂の学問から崎門学派が掃されたこの時期に、巨理に於いては虎門によってもたらされた崎門学派の学問が根付き始めたことを物語っているのである。

とところで、虎門には「鼓缶子年譜」という自筆年譜があるが、天保五年より没年の同十年に至る最晩年六年間の記載がなく、さらに巨理伊達家および日就館に関する記述自体も「鼓缶子年譜」に一切ない。これらのことは両者の関係を考える上で些か不自然な感を免れない。しかし、上述した「伊達家文庫」所蔵の『論語摘疏』のうち一冊に巨理家家臣村山元孝が虎門より『論語摘疏』を借り受け、それを筆写した際の奥書がある。すなわち、

右摘疏二十篇从天保四年初冬寫始、天保七年初冬上旬、以初學餘力遂寫終之者也。此 者予從櫻田先生借用而寫之者也。

論語二十篇合而爲四冊。寫中多誤字。讀者可察之也。村山敬

齋元孝時十七歲

とあり、天保四年から七年までの四年間、村山元孝が虎門より『論語摘疏』を借り受け、それを筆写したと記すのである。この奥書によれば、右の期間、虎門が巨理伊達家および日就館と密接な関係を持っていたことは明らかであるが、では、如何なる理由で「鼓缶子年譜」にその記載がないのであろうか。

上述した如く、仙台藩は藩校養賢堂に於いて昌平覺出身の大槻平泉のもとで学制改革を行い、以後、幕末に至るまでその方針は堅持され続けた。そして、その学制改革に際して、それに真っ向から反対して下野した虎門は、自己の主張をより鮮明にするために門弟たちと結社碑を建てるなどの反抗的な行動を行い、藩当局からその石碑の撤去を命じられている。⁽¹⁷⁾ すなわち、齋藤恵太郎が、

(欽齋は)平泉とその性格を異にして、事に支吾軋轍を繰返し、平泉の學務事務を阻まんとして種種の手段を用ゐたのであった。(中略)ついに徒を結んで平泉の排擠に熱中し、天神社に結社の碑を建て、碑面に誓盟文と同盟者の姓名を刻んで阻碍した。(中略)欽齋はこれがために藩當局の忌諱に觸れて幽閉せられ、件の碑石また程なく除き去られて一味の徒はみな壊滅四散した。

と言つ如くである。⁽¹⁸⁾ 虎門が実際に幽閉されたか否かは明らかで

ないが、虎門およびその門弟たちは仙台藩にとって厄介者であったことは事実であろう。「鼓缶子年譜」に於ける最晩年の空白期間とは、斯くの如き行動のすぐのちのことであり、かつ虎門が巨理伊達家と密接な関係を持っていた時期に相応しているのである。これらのことを勘案すれば、年譜の空白期間および巨理伊達家に対する一切の記述がないことは恣意的なもの、すなわち、虎門の巨理伊達家に対する配慮があると考えてよいのではなからうか。巨理伊達家が上述の如き行動を起こした人物を招き、藩校の教学方針と異なつた学問を郷学日就館に於いて教授させた意図はわからない。しかし、虎門の側から見れば、斯くの如き苦境のさなかに於いて、巨理伊達家は自身の学問の庇護者である。それゆえにその庇護に依る形で巨理に於ける自身の行動の一切を年譜に記すことを控えたと推測されるのである。

本節に於いては、郷学日就館と崎門学派の関係について考察を加えてきたが、その縁を結んだ人物は桜田虎門であった。虎門の著作については、おもに宮城県図書館および東北大学附属図書館に所蔵されているが網羅的ではなく、この「伊達家文庫」が所蔵する著作によつてその闕を補つことが可能となる。そして、巨理伊達家および日就館の蔵書形成についても虎門が果たした役割が些かなりとも明らかとなった。江戸前期、仙台藩に於いて隆盛を誇つた崎門学派の学問が桜田虎門を通じて巨理伊

達家および日就館に伝わり、その折りに伝わった書籍が一部分ながらも「伊達家文庫」として現在に伝わったのである。

四、むすび

仙台藩に於いて北海道移住を願って許可されたものは、巨理伊達家のほか、角田石川家、白石片倉家、岩出山伊達家、涌谷巨理家、宮床伊達家であるが、主従そろつての移住によって成功を収めたものは巨理伊達・白石片倉・岩出山伊達の三家であつた。このうち、岩出山伊達家は当別に移住したが、その血縁を岩出山に残しての移住であつた。その岩出山の郷学有備館は、前述の如く、仙台藩に於いて創建がもつとも古く、学問が盛んであつた土地であつたが、当主伊達邦直も実兄である伊達邦成と同じように北海道移住の際にその蔵書の多くを持参してゐる。そして、その蔵書はその他の寄託書籍・文書とともに、現在、当別伊達記念館に所蔵されているが、そのうち、江戸儒学書に限れば、『四書』や『五経』の一部、『朱子語類』、『朱子文集』など（いずれも闕本）のほか、崎門学派、とくに山崎闇斎に関するものが多い。すなわち、その著書では、『文會筆録』（闕本）、校刻訓点では、『中庸章句』、『中庸或問』、『易経本義』（繫辭傳上下巻）、『朱子訓子帖』、編次書では、『朱子抄略』（上下巻）、『程書抄略』（上巻）、『大學啓発集』（六巻序例一卷 鮎田氏

旧蔵）が所蔵されている。また、浅見綱齋『靖獻遺言』（巻七・八）も見られる。これらの書籍の存在は、巨理伊達家の崎門関係書籍と同じく、岩出山伊達家の蔵書を特色付けるものであり、さらには仙台藩と崎門学派との関係の深さを示す良い例である。これら崎門の著作が岩出山伊達家にもたらされた経緯は明らかではないが、推測するに、遊佐木齋門下の佐久間洞巖が有備館開学当初（元禄年間）に賓師として招かれており、そのことに由来するのではなからうか。そして、巨理伊達家とは異なり、岩出山伊達家に崎門三傑や仙台崎門派の講義聞書などがほとんど見られないのは、両家に於ける崎門学派の学問の隆盛期、すなわちその蔵書形成時期の違い、換言するならば、天保期に桜田虎門によって崎門の学問がもたらされた巨理伊達家と元禄期に佐久間洞巖による岩出山伊達家という状況の違いに基づくと考えられるのである。これらのことは岩出山伊達家旧蔵書と併せて改めて再論したい。

小論に於いては、「伊達家文庫」およびそれを取り巻く郷学日就館の学問について、江戸儒学との関係から紹介を試みたが、それはごく一部にしか過ぎず、「伊達家文庫」には当時の武士層の教養形成、たとえば、武道や諸芸、和歌、礼儀作法など、当時の武士たちの日常生活のさまざまな側面を知る上で貴重な書籍や文書が所蔵されている。今後のさらなる整理と適切な保存が望まれる。

〔註〕

- (1) 伊達市教育委員会『伊達市開拓記念館所蔵 伊達家文庫目録』(昭和五十五年)なお、現在、「伊達家文庫」は伊達市噴火湾文化研究所に所蔵されている。
- (2) 巨理伊達家の北海道移住については、榎本守恵『侍たちの北海道開拓』(北海道新聞社 平成五年)、伊達宗達・伊達君代『仙台藩最後のお姫さま 北の大地に馳せた夢』(人物往来社 平成十六年)および『新編伊達町史』(渡辺茂編著 上巻 三一書房 昭和四十七年)、『巨理町史』(上巻 巨理町史編纂委員会 昭和五十年)を参照した。
- (3) 「伊達家文庫」所蔵の書籍は蔵書印の捺印が少なく、巨理伊達家蔵書と日就館蔵書を区別することがほとんどできないため、小論に於いては両者を一括して扱った。
- (4) 結城陸郎『足利学校の教育史的研究』(第一法規出版社 昭和六十二年)五三九頁以下を参照。
- (5) 書状は、『近代足利市史 五』(足利市史編さん委員会 昭和五十四年 九九三頁)、鈴木喜六『足利学校と巨理日就館』(『郷土』「わたり」第二十三号 昭和四十二年)、前掲注(2)『巨理町史』(上巻 四七六頁 鈴木「足利学校と巨理日就館」の転載)に、また、書状控えが結城前掲注(4)五六六頁に収録されている。両者には字句の異同が若干あるが、その主旨は変わりない。小論では『近代足利市史 五』によった。なお、書状および同控えとも、現在、その所在は明らかではない。
- (6) 結城前掲書注(4)。
- (7) 結城前掲書注(4) 五六六頁。
- (8) 伊達他前掲書注(2)は田村顕允による邦成への北海道移住の献策を明治二年五月のこととする。もしそうであるならば、両者を直接的に結び付けることは一層難しくなるだろう。
- (9) 長澤規矩也「足利學校藏書の集散について(下ノ一)」、『長澤規矩也著作集』第一巻 汲古書院 昭和五十七年 三四五頁)を参照。
- (10) 伊達市噴火湾文化研究所が所蔵する複写による。
- (11) 榎本前掲書注(2) 六五頁。
- (12) 二松学舎大学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」で公開している「日本漢文文献目録データベース」(<http://www.nishogakusha-coe.net/database/>)では、現在、公開非公開を含めて、「伊達家文庫」所蔵の百四十三部の書籍が登録されている。
- (13) 山崎闇齋点「五経」も闕本ながら見られるが、これは門人雲川弘毅の訓点を書肆が山崎点と表題して販売したものである。詳しくは「闇齋先生著書解説」(『山崎闇齋全集』第五巻所収 ぺりかん社 昭和五十三年)を参照。
- (14) 仙台藩の学問については、主として平重道「仙台藩儒学史」(『宮城縣史』十二 学問宗教編所収 昭和三十七年)を参照した。また、遊佐木斎については、高梁美由紀「崎門学者・遊佐木斎の思想」(渡辺信夫編『宮城の研究』第五巻 清文堂 昭和五八年)がある。
- (15) 『仙台叢書』第七巻 昭和四十七年 復刻版 宝文堂出版販売)所収。また、『鼓缶子文章』卷三(『日本儒林叢書』第十四巻 昭和四十六年 復刻版 鳳出版)にも所収。
- (16) 前掲注(2)『巨理町史』四七三頁。なお、『宮城縣史』(十一 教育編 昭和三十四年 六四頁)は虎門の招聘を九代邑主村好の寛政年間とする。
- (17) 若林友輔「結社誓辭由来」(『仙台叢書続刊』 昭和十一年 仙台叢書刊行会)を参照。
- (18) 『史談 藩学と土風 二十六藩』(昭和十九年初版 東洋

書院 昭和五十一年) 六九二頁。

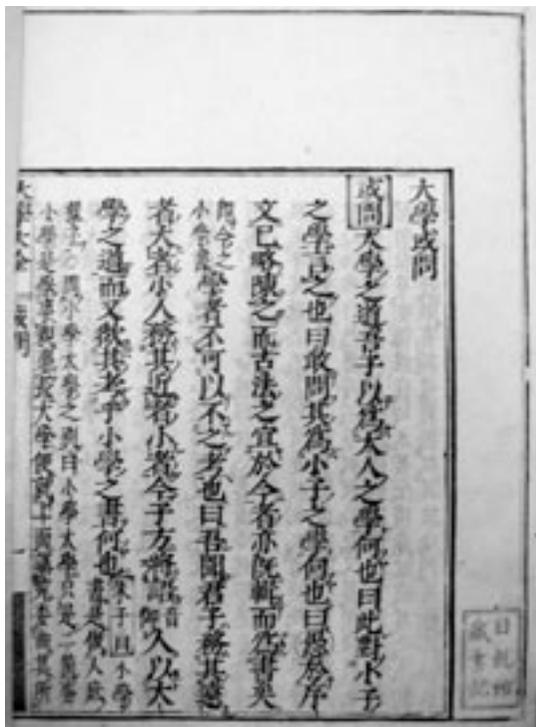
(19) 当別教育委員会『当別伊達記念館所蔵 書籍文書等目録』

(第1集 平成4年 第2集 平成6年)

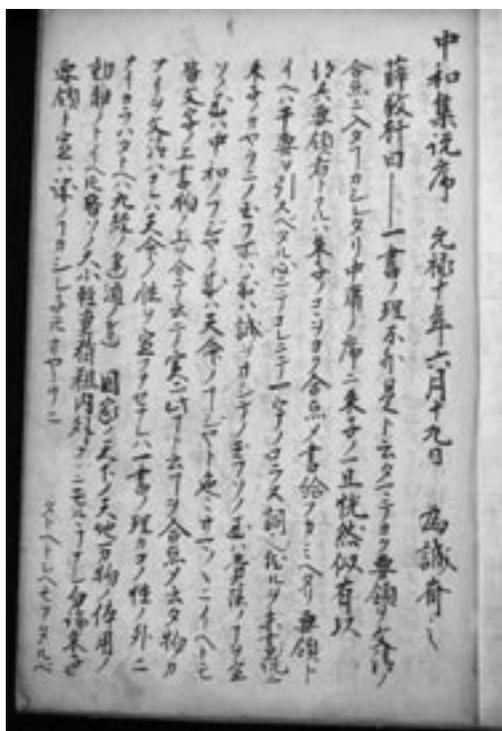
小論で紹介した伊達市噴火湾文化研究所所蔵「伊達家文庫」は、二松学舎大学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」に於ける漢文文献の所在地調査の過程で知り得たものであり、そのうち、伊達市噴火湾文化研究所、足利学校遺蹟図書館および仙台市に於いて調査を行い、今回、小論を公表するに至った。調査に際して、伊達市噴火湾文化研究所および足利学校遺蹟図書館より文献の閲覧や撮影等の格段のご配慮を賜った。ここに記して御礼申し上げます。



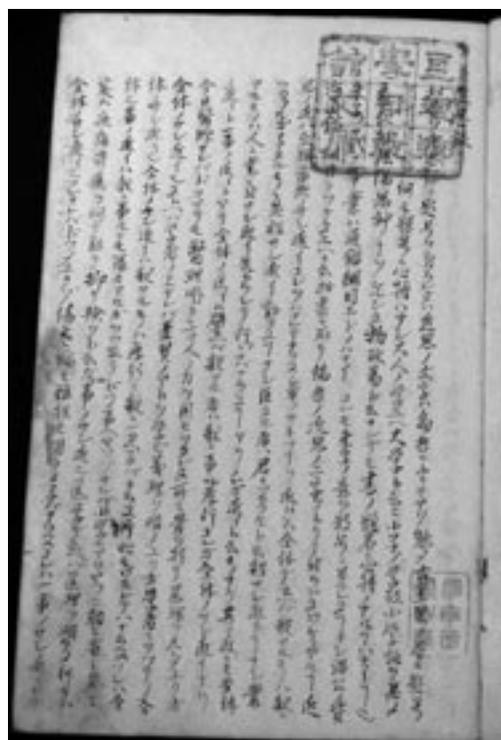
日就館蔵書印（『大學或問』）



足利学校所蔵『大學或問』



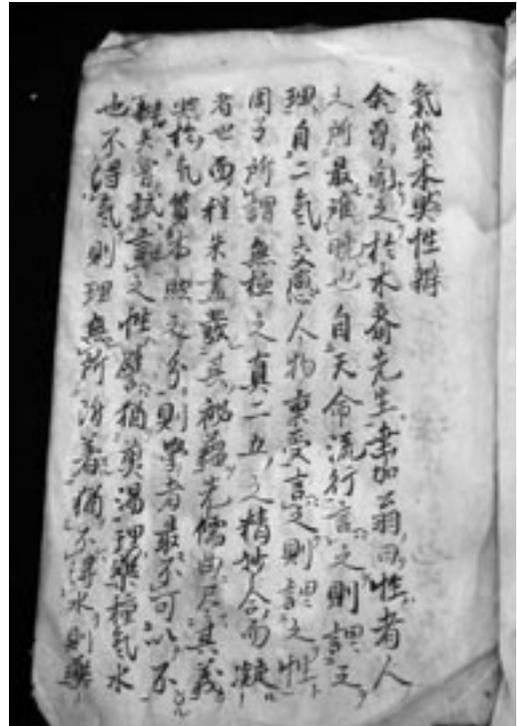
伊達家文庫蔵『木齋先生講筵 中和集說講義』



伊達家文庫蔵『綱齋先生近思錄講義』



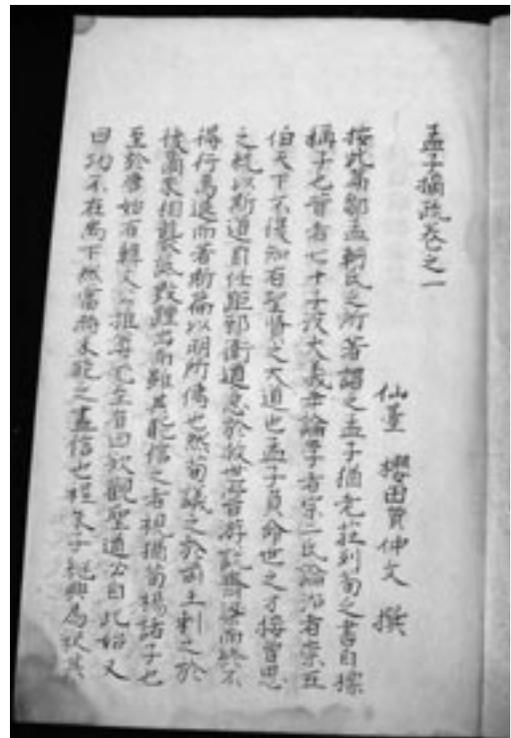
伊達家文庫所蔵『論語摘疏』



伊達家文庫所蔵『氣質本然性辨』



伊達家文庫所蔵 桜田虎門自筆講義稿本



伊達家文庫所蔵『孟子摘疏』